



LIVE REPORT

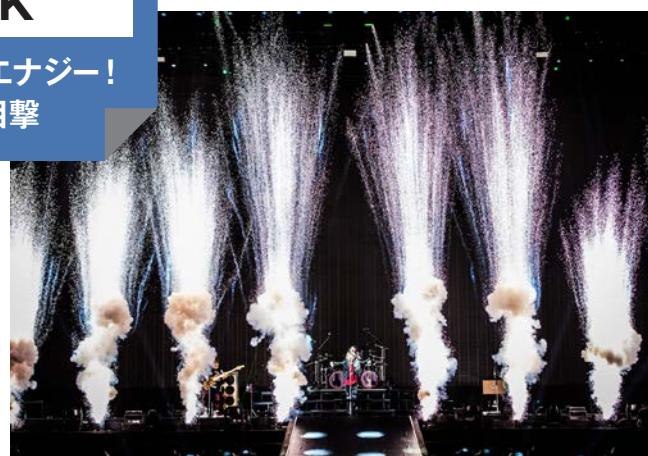
03 | 31 sat. 京セラドーム大阪

ONE OK ROCK

ドーム規模でも溢れ出す膨大なエネルギー！  
挑み続ける4人の新章を目撃

海外デビューなど一層の目覚ましい活動を経て、バンドの新章突入を高らかに告げた初のドームツアー初日。開場時に配布されたシンクロライトを腕に巻いた、実に4万人もの観客が今か今かと開演を待たず、暗転。1曲目『Taking Off』から瞬時にテンションは最高潮へ！ステージの両端を駆け抜け、1人ひとりに声を届けようとするTAKA(Vo)は、客席へ伸びる花道にも飛び出し、熱量高く『キミシダイ列車』をお見舞いする。ビッグシンガロングも壮大な音のひとつと化す『Cry out』、続いて4人の放つ音像が幾層にも重なり、その波にサーフする『Clock Strikes』の快感さたるや！惜しめないアンセムの連続投下、客席の熱狂は増す一方向。

さて、画面に映るはバンドの歴史を辿るムービー。小さなライブハウスにはじまり、ホール、アリーナ、野外……段々とスケールアップしていくライブ映像に目を奪われる中、何と会場後方にミニステージが出現！「後ろ来たで！め



ちゃ近い」(TORU / Gt)との言葉どおり、後方とも一気に距離を縮めてくれる。「大阪はなかなかお客さん集まらなかったなあ」(RYOTA / Ba)なんて昔を振り返りつつ見る“今”には、自然とこみ上げてくるものが。コンパクトなステージにふさわしく、アコースティックでのデビュー曲『内秘心書』では11年で得た成熟も見せ、続く『Wherever you are』では、少年のようなナイーブな歌声を紡ぐTAKA。と思えば、ギターを手にし



た彼は、ソロでの『Last Dance』を描き出す。ロックスターとしての表情とはまた違い、歌心たっぷりに伸び伸びと声を上げ奏でる姿は、シンガーとしての純度の高さを改めて感じさせてくれた。

そんなハートウォームな時間からメインステージへと鮮やかにスイッチ！雷鳴の如くタフネスなTOMOYA(Ds)のドラミングから、後半戦の狼煙が上がる。ドライブ感たっぷりの極太ベースリフに、拳を突き上げずにはいられない『Deeper Deeper』は、まさに四位一体！全員の存在を等しく眼前に感じるような圧巻のステージングは、最早ドーム規模の会場ですら溢れ出すほど



だ。一転、TORUの繊細なメロディラインを道しるべに、静かに鳴らされたのは『Take what you want』。まるで海底に潜ったような神々しいまでの空気の中、その静寂を切り裂くように絶唱するTAKA。アリーナもスタンドも、物理的な距離を飛び越え、観客1人ひとりに迫るようなドラマチックな歌声……。そのアンサーとして自然発生的に湧出するシンガロングにも、彼は両手を大きく広げて応えていく。

そして本編ラストを飾るのは『Nobody's Home』。シンクロライトが無数の星屑のように点滅し、オーディエンスの眩しい笑顔と共鳴する絶景。自身のルーツ=家



族への思いを綴った名曲を前に、「ある人に見せたかった景色です」と口にしたTAKAの照れくさそうな表情に、等身大の青年たる姿が垣間見えた瞬間だった。

アンコールは、本邦初プレイという新曲『Change』でスタート。ワールドワイドな視点を持つスリリングなリズムからの清新なギターリフは、彼らを何段もの高みへといざなうよう。しかし「この曲で終わりたいわけじゃねえだろう！」と扇動するや『完全感覚Dreamer』へ！軽やかに変貌しつつ、だが根幹に流れる強靭さと繊細なエモーションは彼らの源流としてあり続ける……ネクストレベルの最新曲から初期作に回帰する流れにそう強く感じるの、何とも嬉しい心地だ。

そして、いよいよオーラスとなった『We are』では、惜しむようにメロディを、リズムを、そして歌をつなぐメンバーとオーディエンス。「皆さんと僕たちでONE OK ROCKです」。全エネルギーを空にし、ステージに崩れ落ちたTAKAが発したこの言葉。ここまでバンドと客席がシ

ンクロできるライブを創り出せるのは彼らにおいて、他にはいない。ラスト、花道を駆け、ドームに集った全員に向けて「ありがとう！」と手を振り続ける笑顔いっぱいの彼ら。「挑戦するか、止めてしまうか。いつもその二択しかない。挑戦したその先にこの景色がある」。その言葉通り、待ち受ける第2章へも歩みを止めない、そんな決意が詰まった壮絶でやさしい空間となった。

Digital Single 「Change」 out now!!

Live DVD & Blu-ray 「ONE OK ROCK 2017 "Ambitions" JAPAN TOUR」 5.16 out!!